

「限界集落」とは、過疎化し、人口の過半数を65歳以上の高齢者が占めて公共機能が低下し、日常生活がままならなくなっている集落のことである。一般的に考えれば、「コンパクトシティ」は住民にも行政にも都合がいい。しかし、それでは片付けられない問題があると思う。2つの点から「コンパクトシティ」という政策を考えてみたい。

第一に、「心」の問題だ。なぜ限界集落に住む続ける人がいるのか。それは本文で語られている。正登の「ここはおれの生まれ育った村だ。できればここで骨を埋めたい」という言葉だ。確かに、コンパクトシティは住み心地はいいだろう。しかし、そこには思い出や愛着がない。行政のために住民が存在しているのではなく、住民のために行政が存在しているのだから、行政は住民の「心」の問題にも向き合う必要があるだろう。

第二に、「限界」とは誰が決めたのかという問題だ。過疎化した原因のひとつに、生活に「限界」を感じ、転出した住民がいるのは事実だろう。しかし、現実には人が住んで生活をしている。住民は、不安は感じて「限界」とは感じていないからその地域で暮らし続けているのではないか。「限界」と決めたのは、効率的な運営を優先させたい行政の側の都合ではなかったのか。そう考えるなら、安易に「限界」を設定し、コンパクトシティへと移住を促すような政策は慎みたい。

地域政策を考えるとき、郷土愛がすべての基本になるのだと私は考える。「故郷をよくしたい」「住みやすくしたい」「魅力的な場所にしたい」。このような住民の愛着こそが、行政の政策の推進力になるはずだ。それなしには、政策は機能しないし、動かない。全国に点在するいわゆる「限界集落」の存在は、郷土愛の多さと深さの象徴であり、住民の方を向いた政策を切望する無言の声なのかもしれない。